

明治四十年

日誌

青年寄宿舍

日誌

青年寄宿舍

明治四十年一月

一月一日 一陽来復茲に明治四十年を迎えた。

只一夜眠った許りであるのに昨日と八全くうち変りて心八陽気に門松の立ちすまい、国旗の翻々たる又寄宿舍の堂に八瑞気満ち々々て何となく正月ふるを覚えしめた。一年の計は元旦にありと、今年は舎生一同が心を同じくし主義を同じくし又同じ理想に向ひ、歳の終り当って失敗の歴史のページを埋めることのない様にしたいものである。

七時半一同食堂に集って吉田副舎長の新年の挨拶ありて後、各自雑煮の数杯を傾けた。夕食後トランプを遊んだ。春風暖かにして和楽談笑の声高かった。遠くに笈を負うて懐しい郷里の故山を去り、暖かき家庭を離れて北海の天地に学べる舎生ら八父母の膝下にあらずとも又愛するものと「御目で度う」と云ひ換はずことなくとも尚それ等に優れる愉快を感じるものがある。

新聞雑誌の競売の結果次の如し。

読売	二十六銭五リ	吉田君
萬朝	十四銭	吉田君
タイムス	十六銭五リ	若木君
中学世界	九銭	松本君
中学世界増刊	十五銭	石津

一月二日 今日毎年の例として宮部先生に招待される日である。本年も亦舎生一同が招待せられて午後五時半頃に一同先生宅へ出掛けた。先生が高位高官にあられながら城府を設けずしてかくも舎生を先生の傍近く召さるゝ八舎生一同が光栄とするところである。先づ先生の写真を拝見した。先生が幼時、又昔札幌で新渡〔戸〕辺先生、内村先生等と

共に撮られた写真は殊に感を深ふした。次に遊戯八はじまった。カルタ、トランプ、錢廻し、家族合せ、先生も此の遊びに交はれて舎生と共に胞襟を開いて辺幅を修むことなくして無邪気に遊ばれた。嗚呼実に先生八我舎の指導者である否我舎生の父である、我等八徳高くして、而して望み八重き温厚篤実の先生を我が父と云ひ得ることを誇りとするのである。かくて林檎、蜜柑、菓子御馳走についですしの御馳走があった、各自平ぐること二皿、時に胃蔵〔臟〕、腸蔵〔臟〕の不平甚し、依りて笑ひ競争をなして一夜の短かきを嘆じつゝ、惜しき別を告げて散じた。寄宿舎へ帰りし時八一時半頃明月皓々として中空に昇り、風八劔鋒よりも鋭どし。

一月三日 昨夜眠に就きし時間遅かりし為め今朝後れて食堂に集ったものが多い様に見受けられた。

一月四日 今日にて所謂御正月ならざれどもトランプ、カルタの声内に高くユートピアなるを覚えしめぬ。

一月五日 明治四十年八凡に五日過ぎたけれども何処となく陽気な所がある。

今日までに年賀状を給はりたる諸兄八次の如し、

今興〔興〕太郎君、瀬戸太一君、江川金吾君、羽生氏俊君、川尻仁君、黄金井解三君、白井七郎君。

一月六日 長く滝川村に遊ばれし山中道一君夕方帰舎す。

山下君八昨夜外泊せられた（但し証明書を持ち帰へられた。）

本日年始状を給はりたる諸君八次に、

武田平三郎君、藤井為次郎君、角野与一郎君、倉賀野正胤君

江川君夜帰舎せられた。山中君と共に食事八明朝より。

一月七日 十二日演説会を開くことにす。

角野君帰舎せらる。食事八八日より。

瀬戸君夜九時頃帰舎せられた。温き家庭にて新年を迎へて新しい希望を以て帰舎せられたる諸君の御得意思ふべし。

一月八日 農学校、中学校の始業式が挙行された。

佐藤校長の言に諸子は perfection of character を期せられる。之八只農学校の生徒のみならず此の寄宿舎の各舎生が共に之に向つて向上したいものである。

夕方委員会が開かれた。先づ第一の問題八学僕の件について、今の学僕が出てから候補者たるべきものに就いてであった。農芸科生谷藤がその後補者たることは決つたが何時から現在のと交替するかの問題八未決である。次に九月の会計決算の際余を生じた五円余の始末につき協議した。一月八餅代などにて多く負担する様になるから之に補助の説、又八消火器購買の説もあつたが、一月の会計に補助すること八会計決算を待つて何れにか決定する様に衆議が纏つた。

今君夕方帰舎せらる。食事八明朝より。

一時寂莫を感じた舎内も中学生諸氏が帰られたので賑はしく活気に満ちた様になった。

一月九日

一月十日 和田君と瀬戸君と八互に室を換へて和田君は近藤君と共に二八号室に入れ、瀬戸君は門野君と共に六号室に入られた。

瀬戸君は門野君と共に寒さに苦しめらるの余りストーブを使はる。

一月十一日 高松信三君より年始状より。

兼ねて広告して置いた通りに六時から演説会があった。

先づ委員の開会の辞について松前君の老成人的口調にて忍耐と勤勉とについて話された。次に瀬戸君は、豊太閤を思ふの題にてカーライルの態度又言語にて君の英雄観を話されたが、之八君が平生読書されて得られたる思想と思ふ。次に和田君の The Universe と云へる英語演説があった。吉田君が後で批評されて云はるゝに八天来の音楽の様であると、之より外に形容すべき語を知らない。次は山中君と克己と云ふ演説であったが、余り短くて残念であった。次は斉藤君の知性と趣味と云ふもので、自然と友とせよと極く詩的に美的の演説であった、次いで荘司君の成功と云ふ題で、基督教により成功の意味を説明し、三十分間以上にわたる長演説であった。次に吉田君が演壇に立たれ今日の弁士の演説につき批評があり、吹雪が実に男らしく、男性的にして勇ましく之を見ると我身八飛び立つが如しと、説べられた。物は見様によれば、自分等が寒くていやなものと思つて居た吹雪もかくの如き教訓を与へるものかと思つて思ひ掛けぬ所より力を得た。要するに今日の弁士の演説ハアリストートルも三舎を避けん許りの所謂雄弁能舌懸河の弁尚舎生一同が練習一舌能く万民の心慮を集むの域に達せられんことを希望するものである。終つて僅か許りの菓子に胃をふくらかして会を閉じた、尚此の会が今後益々発達して此の寄宿舎の唯一の集りとなり舎生が唯一の議論を戦はずべき所として是を応用することに躊躇せざらんことを願ふのである。

一月十六日 寒さも段烈しくなつて来た。スケーティングに尤も好時節此の寄宿舎の舎生の内にてスケート熱中々熾になつて来た。

在台井街氏より年賀状を給はる。

一月十九日 札幌中学校にて八真駒内に雪中遠足あり。

豚汁の御馳走ありて中学生諸君の帰られしは五時半頃。

札幌農学校基督教青年会の今春の第一の活動として日本基督教会に於て午後六時より公開演説会開かれたり。弁士として森本農学士「ルーズベルト基督教観」、佐藤農学博士「青年の任務」の演説ありて聴衆無慮三百。さしもの広き食堂も立錫の地なき迄に至りぬ。此の日八日曜にて舎生の徒然なるにや午後一時を合図に舎の前庭にて雪合戦は開かれぬ。午後一時頃、委員会を開いた。一月の月次会八二十六日(土曜日)に開くこと、現今の学僕八二十五日より傭を解くこと(但し依頼により)、その後任の学僕八二十四日より入舎して働くこと、又新学僕の仕事も一定につき協議した。

此の頃の天気温かくて身八北海の天地にあるを忘れしめて春風慕はしく吹く故郷にあるを覺さしむるものがある。

一月廿一日 夜八時頃北一条西三丁目吉田眼科病院の不幸にも大災にかゝりて全燃、且つ愛児を失ふと聞く。同情の念に堪へざるなり。

一月廿三日 夜食後委員会が開かれた。新旧学僕の送迎会について議した。各自より五錢づゝを集めて此の兩人を送り又向〔迎〕へるために茶話会を開くことにした。

九時より一同食堂に集り吉田副舎長の小林君に対し、在舎中誠実に勤めしことを感謝し、新学僕谷藤正太郎君に常に忠実ならんことを希望する旨挨拶ありて、菓子に一場の歡を尽し十時散会した。

尚、谷藤君が常に此の寄宿舍のため、舎生のため忠実に真面目に責任を帯びて尽され、此の苦学によりて飽くまでも理想の岡に達せられんことを希望する。

昨日、河島醇新長官入札せられたり。

一月二十五日 永く寄宿にあつて寒き冬の日も、暑き夏の日も孜々として勉めて忠実に学僕として働かれた小林俊二君八を乞ふて出らるゝことゝなった。

月次会開かる。委員莊司君、和田君、若木君、山中君。

宮部先生御来会ある筈なりしも風邪のため親しき靄然たる御顔を見せられなかったの八残念であった。

森本先生にも御依頼したが御多忙のため御出席にならなかつた。

六時開会、角野君、江川君、倉賀野君、金子君、近藤君、田中君の演説があつた。終に吉田君の趣味変遷史と二三の注意と又、宮部先生の御注意とを話された。

終つて茶菓を喫し、錢廻しを遊んだ。

一月二十七日 午後一時より札幌中学校に於て雪戦会あり。

一月二十八日 札幌中学校は昨日雪戦会ありしたため休み。

一月二十九日 委員等互に会計決算をなす。

一人一日二三〇・二五五二厘いつもより多額に上つたのは正月のありしたためか。

三田村君、倉賀野君風邪のため床に就かる。此頃流行のインフルエンザのためか。

一月卅一日 永く此の寄宿に真面目なる舎生として居られた瀬戸太一君八退舎せらるゝことゝなった。

新聞雑誌競売左の如し

タイムス 十錢 江川君

読売 二十六錢 吉田君

万朝 十錢 江川君

中学世界 五錢 江川君

二月一日 四十年一月も過ぎて二月を迎えることになった。

札幌の真の寒の気候となつた。外八烈しき吹雪片々たる柳〔絮〕の如き雪が上つて八舞ひ、舞つて八下り……実に荘大なるサブライムな此の現象、之れとても徒にあるので八ない。自然を支配し給ふ神の豊ける愛の御顔を吾等に注ぎ給ひしものか。

二月三日 倉賀野君八朝早く退舎せられた。

前に瀬戸君を送り、今倉賀野君を送る。一時に二人の愛する舎生を送りて舎内は時ならぬに寂莫になった様な気がするものである。尚退舎せられた諸兄も永く此の寄宿舍にありしを覚えて諸兄の念頭に常に「青年寄宿舍の幸せ」てふことのあらんことを願ふこと切なるものなり。

いでや此の兄弟を送るに満腔の誠意を以てし、且つ兄弟の行末永き成功を祈る。

倉賀野君食事せられず。

二月五日 午後五時より大黒座に於て札幌農学校出身農学士河村九淵氏の農演大会あり、寄宿より聞きに行かれた舎生あり

文芸部に部費として集めたものが残れるを幸ひ理想の ルーズベルト集を購入せり、又吉田副舎長は自分の大事なる Origin of species, simple life 水彩画手引を寄附された、多くの舎生が、之等を利用して安部氏の主義たる理想の人に達せられんことを望むものである。

二月九日 札幌中学校に柔道撃剣大会ありし由。

二月十日 農学校に柔道撃剣大会ありし由。

二月十一日 神武天皇橿原に都を定め給ひて大八州国の御位に即き玉ひし後、時を閲すること、二千五百六十七年。其の間、我国愈栄へて茲に瑞たき紀元節を迎へぬ。

農学校、中学校に式あり。

江川君小樽に赴かれた。

今日の夕食八御萩の御馳走久しぶりにて、うまく食った。

二月 日 江川金吾君今夕小樽より帰舎せらる。

我が青年寄宿舍も創立以来凡に八星霜の歴史を てをること、て所々に破損の個所出来た。茲に於て今日ハ一部分の屋根葺をした。

二月十六日 吉田守一君小樽に赴かる。

二月十七日 吉田君夕方帰舎せられたり。

今日八日曜日でも小春の朝の空晴れ愉快な天気なりしたため七八名の舎生は錢函に遠足せられたり。

江川君錢函より小樽に赴かれたり。

江川君帰舎す。

今君滝川に帰る。

月次会を開く、委員柳川君、山下君、江川君、石津君。

宮部先生、森本先生或る事情のため御出席なかりしハ残念の事なり。

三田村の豊臣秀吉に就き、丹治君の過去を悲しむなく、未来を恐る、ことなく現在を勉めよと、又中学生諸君に対する考を述べられた。松本君ハ独乙の碩学カントの伝を説明せられ、柳川君ハカゲローを例にひきて尤も有益なる御演説ありき、後に吉田君の批評と母の愛につき感じをのべられた。

後、愉快なる余興にうつり、閉会せしは十一時頃。

二月二十七日 会計決算報告あり。二三・七四四であった。割に高くなった。

二月二日 新聞雑誌の競売をなすこと次の如し。

読売新聞	二十銭	吉田君
萬朝報	八銭	同
北海タイムス	七銭	山中君
中学世界	十銭	同

札幌座に於いて札幌孤児院の慈善音楽会あり、本舎より行くもの多し。

三田村君小樽へ行く。

三月三日 三田村君帰舎す。

三月八日 委員会を開き、今度中学を卒業せらるゝ諸君のため記念として撮影することにきめた。

三月十日 雪漸く解けんとし、春風徐ろに吹き来りて、花咲き鳥歌春も近きにあるを覚えしむ。

午前十一時半頃若林にて一同撮影す。宮部舎長はうれしい、うれし。

三月十三日 中学校の学年試験始まる。

三月十九日 農学校の第二学期試験始まる。

雪漸く溶け春色表はれんとせしも又寒く白の翻々たるを見る。

試験が来れば洋燈の光炯々として各室静に声なきこと奇妙也、試験も魔力を有するものなる哉。

三月二十二日 今日春季皇霊祭、学校八休みである。併し、皆試験と云ふいやな奴を持ってをるので面白くも遊ばれない。

吉田君は凡に試験を済まし、八時四十七分の汽車で帰京された。舎生一同吉田君を停車場に見送った。

試験中とは云へ余り天気が好いので藻岩、円山へ散歩した人もあった。

三月二十三日 中学校の試験終る。諸君の得意想ふべし。

風烈しくエルムの枝のヒュウヒュウ鳴るも亦をもしろし。

三月二十四日 今君、英文少年世界五部寄附せらる。

米国ユニオン神学校長ホール博士今日講演の筈なりしが、途中病気にかゝられ来札なし。

三月二十五日 予修科二年級前川十郎君入舎せらる。

今君、角野帰舎せらる。

雪八凡二半バとけ、クロバー八凡に芽を出して春風駘蕩たるの風邪エルムの木々吹ひ廻って気八試験の半ばと雖も陽気なり。松前君旅行せらる。

三月二十六日 農学校の試験も今日で全く終る。

時は三月の終り、内地ならば桜に人の狂するときなるに流石北海道で八雪の桜を見る、今日は随分雪がふった。

三月二十八日 会計決算をなす。一人一日平均 ?

吉田君より二十五日午後五時無事着京の報あり。

農学校に農芸科卒業式あり。

午後六時より月次会を兼ねて今君、江川君、瀬戸君の送別会あり。宮部先生も十二月以後欠席勝なりしに係らず今回八御多忙中にも拘らず御出席ありて中々の盛会なりき。

三田村君、荘司君、田中君、石津君、和田君の送別辞を兼ねる所感を述べられ、今君、江川君、瀬戸君八青年寄宿舍の往時を追想して別の辞をのべられし八愉快に感じた所である。

終りて茶菓あり、その間宮部先生八往時の札幌農学校時代の愉快なる談話を御話し下され、先生の城府を設け給はざる高き品性二相待ちて尤もアトラクティブに舎生一同は傾聴した。殊に内村先生の勉強の方法等八後世の我等の手本とすべき所である。

先生帰られて銭廻しをなしぬ。顔面の斑点をくろく十一時半頃開〔解〕散した。時に寒月冴え渡りて月は雲と相映いて四面寂莫たり。

委員の選挙あり、次の如し。

常設委員 齊藤蔵之介君

和田梓之介君

近藤俊治郎君

丹治七郎君

園芸部委員 曲尾寅男君

山下太郎君

運動部委員 三田村正孝君

金子貞次君

之等の委員の手腕が大いに振ふて前学期の委員のなせしよりも多く我が寄宿舍のために貢献して理想的の寄宿舍たるの実を挙ぐる尚多く勉められんことを願ふこと切なるものあり。此の寄宿舍の大任を之等の委員に任すに当り、委員に待〔俟〕つ所大なるべきを思ひて之等諸君に感謝しなければならぬ。

三月三十日 三田村君帰郷せらる。

今学期の委員次の如し（但し常備委員）

会計委員 齊藤蔵之助君

衛生委員 近藤俊二郎君

食事委員 丹治七郎君

文芸委員 和田梓之介君

市中の雪八大抵溶けてしまった。

天下は既に洋々たるものがある。人間も自然天気がついて来る。我が青年寄宿舍で八此の機を利用し、定山溪へ遠足を試むる事と成った。頗る好天気で午前七時中村君を出征師団長として元気よく寄宿舍を出発した。勇士の面々は、中村、近藤、荘司、丹治、田

中、山下、前川、曲尾、山中、和田の諸君である。御料之橋で休息し、昼飯をし、午後二時定山溪へ着し、能阪旅館へ着し、盛に湯に入り、夕食に持参の豚汁で驚くべく多量に食し、十一時頃眠に着く。但し三組の蒲団へ十人が寝る事故、中々苦しかった。留守宅で八江川君退舎せられた。去人八君の前途多望ならん事を祈るものである。又新たに江原愛作君入舎せらる。

四月二日 定山溪軍は午前十一時豚汁で満腹し十二時半帰途に就いた。中々雪が積って居る。大に寒さを感じず。御料の橋で二手に別れ、一方八昨日通りし道、一方八真駒内を通りて何れも六時半頃相前後して軍歌を唱へつゝ、元気よく帰舎した。湯に入り食事を済し、死むる程完全に眠った。

四月三日 新聞を競売し次の如き結果を得。

北海タイムス	八銭	荘司君
萬朝報	十銭五厘	松本君
読売新聞	十七銭五厘	田中君

尚中学世界八中学の諸君の居られざる為め来月まで延期す。

四月四日 夕食後抽籤にて部屋割を定む。組も亦変更したり、即ち次の如し。

一号田中君	二号中村君	三号前川君
	角野君	山中君
四号斉藤君	五号近藤君	六号和田君
松前君	若木君	
七号松本君	八号丹治君	九号石津君
三田村君	江原君	山下君
十号荘司君	十一号柳川君	十二号谷藤君
曲尾君	金子君	

四月五日 久し振りで午前及午後折々雨が降る。今日八朝、農学校予修科の池上三次君が入舎せらる。

四月六日 今日も大半雨天、朝食後一昨日定めた部屋替を実行した。其為明日曜の風呂を今日に代へる。昨日入られた池上三次君八和田君と一緒に六号室に入られる事となる。雨が降って大に気持がわるい、然し次第に暖かになって来た事は確かである。

四月六日 朝来雨天でいやな天気だ。然し、中学校の人々が続々帰られるので大に元気がついた。松前君、角野君午後帰舎せられた。

四月七日 今日も小雨が降っていやな天気だ。

四月八日 今日から愈よ農学校、中学校とも課業が始まる。但し今日の八始業式だ。午後あまり天気がよいので、我が寄宿舎の同輩十人ばかり連れだつて札幌の西方に当る三角山に登った。途中、雪に足がはまり込んで歩行に困難を感じたけれども、大に愉快であった。頂上では盛に雪を食ひ、又雪投げをして午後四時頃隊を作り軍歌を歌ふて帰舎す。

四月九日 テニスコートが大分乾いて来たので午後八盛にラケットを振った。昨年九月よ

り引続き当寄宿舎に居られた田中貫市郎君八本日退舎、南三条西九丁目佐藤といふ家へ下宿せらるゝ事になった。吾人は甚だ我が舎の為に遺憾に思ふ。

四月十日 近頃、一時衰へて居ったピンボンが頭をもたげ食後に八中々盛なり〔欄外に「ピンボン何時頃より始まりしや」とある〕

四月十一日 雨天で中々寒し。

四月十二日 今日も嵐の如き勢にて大に寒冷を感ず。農学校の運動会の近づける為、植物園の中で八夕方徒歩競争の練習をやって居る人が七八人ある様だ。

午後六時より文芸部八演説会を開く。江原君（独立独行）、柳川君（味噌の製造）、金子君（フィリピンの森林）、若木君（未定）、丹治君（混沌たるかな人生）といふ順序にて全体からいって頗る活気に満ちて居った。但し丹治君の演説之演説の終りし後最早九時になったから、残念ながら予定の前川君及池上君の雄弁に八接することが出来なかつた。然し、来月八大にやって貰ふ積りである。

四月十四日 午後二時より道会議堂に於て英国ケンブリッジ大学教授マカリスト博士及佛国モントウパン神学校教授ボア博士の講演あり。寄宿舎の人々挙つて聴きに行った。晩八大通日本基督教会及創成川の美以教会で両氏の説教があつた。

四月十五日 午後七時よりマカリスト及ボア両博士の演説が道会議事堂で開かれた。「科学上より観たる基督教」及「宗教実験の価値」といふので満場に非常に大なる感化を与へられた。

四月十七日 此の二三日八非常に寒冷を感ず、果して午後三時頃より霰、雪交々至り、大に閉口した。但し天下八最早春の天下なり、草木八既に青々たり、快なる哉。

四月十八日 今日八昨日と打つて変りし好天気なり。午後テニスを盛に遊ぶ。

四月十九日 今日も昨日と同じく好天気なりき、東京万国青年大会伝道隊としてウィリアムス及デビス并に田島進の三氏来札、晩の七時より美以教会に於て説教会開かる。但し、中に八不満の人も多かりし様に見受けし八残念なりき。

四月二十日 今日八朝来いやな天気であつた、晩は七時より独立教会昨日より引続いて伝道説教会があつた。

四月二十五日 三田村君帰舎

四月二十六日 運動会が近づいたので植物園でランニングの練習が盛である。

日 長らく東京へ歸つて居られた副舎長吉田君今朝無事帰舎せられたのは甚だ愉快な事である。晩に八六時半より四月の月次会を開く。晩の御馳走は豚飯であつた。さて月次会に八宮部先生は御都合で御出でにならなかつたの八残念であつたが、其の代り石沢達夫先生及吉田君が居られたので大に盛に在つた。弁士八山中君、池上君、前川君で其の次に吉田君と石沢氏の懇切なる話の後、茶菓を喫し、十時半まで遊んだ。

雑誌寒林ノ切

四月三十日 夕飯後新聞競売ス

タイムス 八銭 前川君

万朝	八錢	前川君
読売	十九錢	山中君
中学世界二月分	八錢	角野君
”	三月分	五錢
”	定期増刊	十四錢五厘
		松本君

五月四日 次第に春の景色を呈するに至れり、円山公園の桜八大分膨れたる様なり。

五月五日 朝より雨天、道庁の運動会は定めて大困りなりしなるべし、故に中止せられたり。

五月八日 松本君は実地演習の爲め、野幌農学校林へ行かる。道庁の運動会は本日午後より夜へかけて行八る。

五月九日 松本君帰舎

五月十日 札幌には本日未曾有の大火あり。

午前三時南三条西一丁目の勸工場共益商社より出火、直に火勢を強め遠近を焼き尽し、郵便本局、警察署、札幌支庁等全焼し、札幌の繁華なる町は悉く灰燼となれり。此の南風非常に強く爲めに火の子八遠く農学校辺まで及び、砂塵甚だしく立ちて目開く能はず、実に惨状を極む。午後三時頃より雨降り始む。

五月十一日 今日は農学校の遊戯会の日なりしも昨日の大火の爲め延期して十四日に挙行する事となれり。又仮令火事なきも雨天なる故出来ざりしなるべし、聞く所によれば昨日の火事は三百四十戸ばかり全焼の運命に合ひし由、悲惨の事といふべし。

五月十五日 長く我舎に居られた若木佑祐君が本日退舎せられた。我舎の爲に残念な事である。

五月十六日 久しく延期となつて居った農学校の運動会は本日無事に行八れた。朝来非常の好天気で各種の便誼八大であつたと思ふ。我が寄宿舎で八前川君、丹治君が目出度く賞品を受けられた。又農学校の優勝旗八師範学校の手中に歸した。

五月十七日 農学校八今日八昨日の運動会の労れとして休み、風非常に強し、折々雨あり。

五月十八日 今日も相変らずいやな天気なり、朝より雨降り出し、風さへ加八りて大に閉口す。今日八当地師範学校の運動会のある筈なりしも無論雨天の爲め延期せられしなるべし。近頃の天候不順八驚くに堪えたり。

五月十九日 朝より淋雨蕭々終日雨天、別に変つた事なし。

五月廿一日 今朝より洗面所の湯を廃す。中々冷たし。

五月廿三日 先づ々々好天気にてテニス大会の準備でみんな振つてテニスを練習す。二本丈新しいラケットを用ゆ。

五月廿四日 ヒドイ風雨、寒気強し。

五月廿五日 今日は終日曇天であつた。午後二時より テニス大会開かる。欠席者もあまりなく(一人のみ)万事頗る好都合で愉快であつた。紅白勝負の両方の大将は

白、斉藤、三田村、紅、吉田、江原、此の最後の勝利は白軍の勝利に歸した。此の時の優待者八角野、谷藤組、中村、松前組、斉藤、三田村組。次に東西寮の勝負で東の大將八吉田、斉藤、西の大將八三田村、江原、勝利八結局東寮に歸した。此の競技の優待者八角野、和田組、江原、三田村組であった。丁度五時閉会す。

月次会である。御馳走は鱒の焼いた奴、豚、牛蒡の煮しめで、一同大満足、七時より開会し、三田村君司会し、莊司君、山下君、松本君の諸氏熱心なる弁舌を振八れ、最後に吉田副舎長演説せらる。何れも簡単で要を得て居たの八感服した。但し宮部先生の御出でならなかったの八残念であった。演説の後、テニス優待組の賞品授与式あり、但し賞品は吉田副舎長寄贈せられた。それがすんで茶菓を食ひ、錢廻しをして遊んだ。今晚は舎友大阪正一君も来られたので頗る愉快な一日であった。

五月二十九日 会計決算の結果一日二十二錢二厘七毛。

六月二日(日曜) 夕食後新聞雑誌競売。

タイムス	八錢五厘	和田君
万朝	九錢	山中君
読売	十八錢	池上君
中学世界	五錢	石津君
日本及日本人	七錢五リ	莊司君

六月五日(水) 今朝五時頃中学校の諸君即ち三田村、江原、角野、松前君等八中学校の遠足に行かれた。但し江原君は本日夕方帰舎せらる。

六月六日(木) 今日の夕方、松前君遠足より帰舎せらる。今日八淋々降りつづく。

六月七日(金) 今日の夕方、角野君旅行より帰舎。

六月八日(土) 晩六時より演説会を開く。

第一席石津君、シェークスピアのジュリアス・シーザー中の有名なるブルータスの演説をやられた。音吐朗々、壮快千万、第二席丹治君、氏八有名なるダニエル・ウェブスターの「真の雄弁」といふのを暗誦してやられた。何れも英語で中々愉快であった、然し大二六つかしかつた。最後に吉田君の「札幌に於ける十五年の生涯」といふので小学時代、中学時代、東京時代、札幌農学校時代の歴史を非常に面白く上手に話された。斯くして八時閉会す。今学期の演説会は本日を以て終りとす。

六月九日(日) 此の頃は毎日雨天勝ちないやな天気であったが、今日八非常の好天気です合せだった。

六月十一日(火) 本日夕方三田村君が旅行より帰舎せられ、之で中学の人八皆揃った、此の頃の天気の悪いのは実に困ってしまふ。気象学者に聞くと、昨年の秋大変天気が続いたので其の代りに今年の春に八雨が多いといふ事である。兎に角淋雨蕭々では血氣盛な青年も外に出る事が出来ないので大にがっかりする次第だ。其の中に好い天気になるだらふ。

六月十二日(水) 果して今日は天気になった。久し振りで盛にテニスを遊ぶ。

六月十三日（木） 今日も天気でテニスをやる。夕飯後、札幌神社当日の御馳走の事に付委員より、すし、こはめし、の二つの意見を出し各人の意見を求めた。結果、こはめし党の勝利に帰した。こはめし党万歳！

六月十四日（金） 本日より以後三日間札幌神社の祭礼あり。相変わらず天気非常に悪し。

六月十五日（土） 札幌神社祭礼の為め、各学校休み、今日八寄宿舍で八尚武湯を立て昼八決議通りこはめしの御馳走になる。中々旨かったが、消化困難の夕飯には腹が減らなかつたのには大に閉口した。

六月十六日（日） 午後八時半より寄宿舍の前の庭にて吉田副舎長送別の記念として写真を取る。宮部先生も御出でになったのハうれしかった。写真を写した後、宮部先生は一同に向ひ、吉田君が今回札幌を去らるゝに付て、其の後任として柳川秀興君に副舎長になって貰ふ事にしたと云八れた。今日は雨は降らなかつたが風が吹いて道が悪いので町へ出る人八大困りであった。

六月十七日（月） 今日八かなりよい天気であった。テニス盛なり。農学校の試験も近日より始まる事とて、皆々盛に勉強す。

六月十八日（火） 非常の好天気。

六月十九日（水） 農学校の或る級は今日から試験始まる。

六月二十日（木） 農学校の各級とも今日より試験。

六月二十三日（日） 曲尾君は手稲山へ登らる。今日の北海タイムスへ札幌農科大学の官製発表になったとの電報が出て居った。

六月二十四日（月） 朝より心地悪しき天気にて終日淋雨降る。今日までに試験の済んだ級が大分ある。得意思ふべし、彼等の頭の中には停車場、汽車、汽船等、進んで我が家に着きし時の光景が浮び出る事ならん、世の愉快なるものハ夏休とぞいふめる。

本日宮城県の人庄司惣兵衛君新たに入舎せられたり。

六月二十六日（水） 農学校各科の試験は今日で終った。一同大に愉快になる。晩の六時半より吉田副舎長の送別会、柳川新副舎長の歓迎会及月次会等を兼ねて盛なる集会を開く。宮部舎長も出席せられたので一同大満足の様子であった。

委員丹治君司会し、開会を告げ、最初に角野君の修学旅行談あり、次に三田村君の同じく修学旅行談、それに次いで丹治君は送迎の辞を述べ、近藤君、松本君、石津君等交々立って同じく送迎の辞を述べ、終りに宮部舎長より丁寧なるお話があった。引続いて吉田君の答辞、柳川君の新任の辞があった。之で正式の会を終り、次には遊ぶ会に移り、菓子を食べ、「ナゼ、カラ」をやり「雷」をやり、次に白の面を数人の顔にかぶせて自分で墨にて顔を書かせて大笑した。それから各々歌をうたひなどして十二時まで遊んだ。実に愉快であった。

六月二十七日（木） 今日の午後、丹治君が突然帰省の途に就いた。午後六時二十分の汽車で吉田君は愈よ札幌を去って東京へ向はれた。一同停車場まで見送りした。一日に二人も寄宿舍を去られたので大分淋しくなつた様な気がする。

六月二十八日(金) 近頃は非常に天気がよく大層暖くなった。内地の夏の様な気がする。

午後四時より道会議事堂に於てエール大学名誉教授ラッド博士が今日より三日続いて教育に関する講演会が開かれる。今日の題は「教師の準備」といふので通訳は、農学校講師高杉栄次郎氏であった。

〔この夏に明治四十年日誌の抜き書き - ペン書き - 一月二日、同十二日、二月六日、三月二十九日、六月八日、同十三日、同二十三日、九月二十一日、十一月九日の分 - 別紙が挿入されている〕

今日の午前宮部先生は西十三丁目北四条へ臨時移転されたので寄宿舍からは七八名手伝に行つて御馳走になった。

六月二十九日(土) 早朝先づ金子君が帰省の途に着かれ、次いで近藤君は実地研究の爲め留萌方面へ向かれ、山中君は日中帰省の途に就かれた。一日に三人も出立されたので寄宿舍八大変淋しくなつてしまった。

六月三十日(日) 午後三時頃の室蘭行の汽車で荘司君が帰省の途に就かれた。

七月一日(月) 大変によい天気です。テニスをやる人が非常に多い。然し中々暑いので日中は中々苦しい。

七月二日(火) 午前八よき天気であつたが夕方少し曇つて来た。然し風が静かに吹いて居るので涼しくつてよかつた。

本日は札幌農学校の卒業式が行はれた。式は午前十時に始まり、先づ佐藤校長の挙式の辞に次いで宮部教務部長より教務の報告あり、校長は再び起て一場の述懐を為せり。彼れの日是れ実に札幌農学校最終の卒業式にして又札幌農学校と永別せざるべからざるの時なり、之れよりは全く新たに来る札幌農科大学を迎ふるなりとて其れより農学校の沿革を述べ、卒業生に訓諭をのべて終る。

札幌農学校と共に生れ共に生長せし佐藤校長也、今此の最終の卒業式に当りてうた、追懐に堪へずやあらん。

式終りて一同門衛にてマンジュウをもらつて帰る。

午後三時三分の列車にて池上三次君帰る。

七月五日 齊藤君かへらる。

七月七日 前川君かへらる。

七月三日 松本君修学旅行を兼ね帰省せらる。

七月十一日 山下太郎君帰る。

多くの人々はなつかしきたらちねの母の膝元に久しぶりにて打ちかたたる、頃なるらん、此処の寄宿に残れるは、農学校生徒四五人と中学生のみなれど中学生は午前中は登校しおればさびしき事云はん方なし、午前中は思い理事々々のつとめに時をおくり中食を待ち終れば打ち揃ふてテニスコートにラケットの音勇ましく笑声さかなり。

二三日、柳川副舎長は小さきウサギーつがひを購ひ来りて飼はる。

七月二十日 近藤君一寸帰舎さる。

七月二十一日 近藤君再出張さる。

七月二十三日 和田、石津、庄司、中村の四氏、蝦夷富士に登山旅行せらる。

道程は、午前六時十五分札幌駅発小樽を経て午前十一時倶知安着登山会事務所に立寄り、再び出発、午後七時山頂宿泊所に着せり、麓より此処迄七十余丁五時間にて達せり、道甚だ急にして^擧登易からず、頂上の眺め甚だよく、気候も冷しかりし、翌朝七時より十時半迄噴火口をめぐり且つ入り、植物を採集し、雪を食ひ愉快地に遊び、午前十一時半過下山す。比羅夫より列車にのり小樽（中央）に下車し、宿屋をあさり、夕食後漸時散歩し床につく。翌朝、赤^岩温泉に遊び、高嶋水産試験場に立ちより、四時半の列車にて帰札す。是行、大凡天気よく甚好旅行なりき、旅費四円二三十銭位なりと。只記して後の人の菜とせんか。

中学校の学期試験も結了せり、故に月次会例会を開く、開会直ちに茶菓に移り、後遊戯をなして一時に及ぶ。舎長は御出で遊ばされず。

七月二十六日 角野君帰らる

七月二十七日 三田村君定山溪に旅行せらる。

七月二十八日 江原君は樺太に旅行せられ、松前君は忍路に行かる。

七月二十九日 会計決算をなす。

七月二十九日 三田村君定山溪よりかへらる。

七月三十一日 田中貫一郎君、古賀君入舎せらる。

八月一日 三田村君銭函に行かる。

八月三日 夜遅く江原君帰舎さる。愈々明日出発せんとて一旦帰られたるなり。

八月五日 三田村君かへる。

八月七日 三田村君帰省せらる。

八月十二日 曲尾君上川方面に旅行せらる

八月十九日 午後、鈴木限三郎君入舎さる。

八月二十一日 山下太郎君帰らる。

八月二十四日 午後三時頃江原君樺太よりかへらる。

八月二十八日 三田村君、角野君かへらる。

九月一日 松前、曲尾両氏かへらる。

九月六日 野津久雄君入舎せらる。

九月七日 荘司君と山中君とがかへってきた。

九月八日 丹治君と池上君かへりくる。

九月十日 松本君と斉藤君かへる。

十日 近藤君かへる。

小野崎浩三くん入舎さる。

九月十四日 金子君かへる。

山中君退舎す。

月次会兼新入舎生歓迎会を開く

石沢前副舎長、宮部舎長も御出になった。

石沢氏は感謝と云ふ事に付て述べられた、我等の母は最も感謝すべきものにして、若し当今の自殺青年学生に於て一片の之の感謝を捧ぐべきものあらば、決して彼等の如き愚かなる事に出でざるべし、実に彼等の自殺は不変に己れを愛してくれるもの、即ち常に感謝すべきのなき故なり、且つ人若し母より偉大なる愛者を見とめて之れに向つて万腔の感謝を捧ぐる時や其悦び限りあらざるべしと、猶人は事の全般に通して考ふべきなりと説かれたり。

宮部先生は近頃、比常の心労の為芽只一言あいさつせられたるのみなり。

今学期の委員八撰挙の結果如左

会計委員	前川十郎君
食事委員	莊司経雄君
衛生委員	松本純爾君
文芸委員	鈴木限三君

十月二日 学僕福永 君来る、旧学僕谷藤君八都合ありて辞したればなり。

林科一年の添田 君入舎さる。

テニス大会を開く、朝より曇りて心配せしが、あまり雨は降らず、僅に滴雨の地を湿すに過ぎざりし八幸ひなりき。

紅白勝負八紅組の大將八齊藤・三田村組、白紅八江原・小野崎組にて紅組の勝となり、東西寮の勝負二八東寮の勝となる。優退者の諸君は〔以下四行空白〕

十月六日 齊藤君退舎さる。君八永く寄宿舎の柱名たりし二今や舎を退かる。名残り惜しきことなり。

十月七日 早朝鈴木限三君修学旅行として岩内へ行く、二泊なり。

十月八日 前川君、中村君、池上君幾春別炭山へ地偵旅行二行かる。柳川君も砂川地方へ昆虫旅行せられ、古賀君も岩内へ水産旅行二向はる。

十月九日 幾春別炭山へ旅行されし諸君及び岩内へ行きし鈴木君も帰舎す。

十月十日 柳川君、古賀君何れも旅行先きより帰り。

十月十二日 夕飯後新聞競売

読売(九、十月分)	二十一銭	松本君
万朝(九、十月分)	十八銭	田中君
北海タイムス(" ")	十三銭五厘	莊司君
中学世界(九月八月分)	十二銭	近藤君

全 臨時増刊 七銭 江原君

鈴木君定山溪へ旅行す。

寄宿舎の企てにて一泊して手稲登山をやる。一泊八山上にてするつもりなりしも出発が午後なり為め遂に山麓の百姓屋の納屋にて一泊す。今宵月よ 南瓜を煮て食ふ、盛んなり。

十月十七日 手稲登山の一行八朝目覚ざれば雨降りなり、到底登山すべくもあらず、ガッカリする。糧食八後発隊が札幌より持ち来る筈なりしゆへ、それを待ち合せ、雨を冒して帰路につく、午後三時二帰舎す。

山下君旭川地方へ旅行す。鈴木君八定山溪より夜遅く帰る。今夜九時頃、札幌木材会社の一部焼失す。寄宿舎より八皆掛けつける。あまりに近火たるゆへ、木材会社なればよく燃えたり。

今夜八月次会あり、又斎藤蔵之助君の送別会を兼ねたり。古賀君の司会ニ中村君、野津君、鈴木君演説す。又送別の辞あり、柳川副舎長も送別の辞を述べらる、後斎藤君起って答辞せらる、終って菓子、林檎を一生懸命ニ食ひ、銭かくしをやって遊ぶ、此時、宮部舎長も来られ共に愉快ニ大騒ぎをやり、十一時ニ散会す。

十月廿日 山下君帰らる。

十月廿五日 荘司経雄君、鼻切開の為め北辰病院に入院さる。

十月廿六日 第九回記念会二つきて委員会を開き、来る十月九日ニ執行することに定む。

十月廿五日 ストーブ火鉢を使用するニ就て部屋替へあり。

一鈴木 二野津 三石津 四前川 五荘司
古賀 角野 三田村 曲尾 山下
六金子 七池上 八田中 九近藤 十丹治
和田 小野崎 松前 添田 江原
十一松本 十二別宮
中村 福永

十月廿九日 荘司君退院し帰舎せらる。

十一月二日 夕飯後新聞競売ス

北海タイムス十一月分 十一銭 柳川君
万朝報 十一月分 十銭 野津君
読売 十一月分 廿銭 荘司君
中学世界 十月発行 九銭 柳川君

此夕第九回創立記念祭を開いた。

午後四時半頃より来賓の方々八副舎長室及び第一号ニ早や、詰めかけられ、火鉢を囲んで談笑せらる。接待役は鈴木君、松前君、江原君（君は然れども病氣の為め今晚逸見病院へ入院さる）なり。

会場は如何と見るニ今日昼よりの奔走空しからず、見ちがへるばかりニ飾られて、東面

の壁ニハ「祝紀念」と白字ニてあらはせる手製の清楚なる額を掛け、四辺の壁ハ各室より徴収せる名画の額あり、天井ニハ縦横に掛け渡せる世界各国の国旗翩翩と翻へる。これハ各舎生の画ける紙製国旗なり。

然れどもその色彩の多様なる、あたりの白壁に反射して光彩得も云はれず、真ニこれ地上に実顕されたる天の宮殿かと疑はる、又疑ってをけば間違はなし、机上ハ一面ニ白のテーブルクロスニて被はれ、日頃の洗面の食台も今日は白紙を以て巧ニ化けて済ましたり。加之ニ大きな二つの花瓶（之は他より借りたり、後の人その〔つ〕もりで）ニハ大輪咲きの馥郁たる菊花、全堂を押し香を放てり、さて此日の装飾係ハ池上君、田中君、石津君、荘司君、小野崎君なり。

かくて、来賓も、舎生も皆、腹を空かして待ち居る程ニ、食堂ニ当ってハ食事係の近藤君、松本君、中村君、丹治君、角野君、曲尾君など、ばあやと共ニ忙しく準備し居られ、いよいよ準備よしとの報らせニ、食堂ニ行き見ればならびも並びたり、白きテーブルの上ニハ

飯（白） 口取（鮭、カマボコ、キントン、カキ） 吸物（鶏、牛蒡、葱） うま煮（豚肉、牛蒡、コンニャク） 漬物（たま菜）

が排〔配〕列美しく、処狭きまでならべられたり、小食なる我は閑あるまゝ、二つら々々来賓を見渡せば宮部先生を始めとし、高松君、逢坂君、吉川君、田中稔氏、上野君、朝倉君、斎藤君、徳田君、村上君、田中（元）君などニて中ニハ前後も知らず食ひ給ふもあり……しならんか。我ハその後のことを知らず、只ヤット人心地つけバ始めて知れり、腹の頗る重くして机上の皿と椀との全て空しきを、あわて、食堂を退くときハ既ニ来賓諸君は、控室ニて各、腹を撫しつゝありき。

式は七時前より生まれり、柳川副舎長の開会の辞ニつぎ各委員の報告あり、柳川副舎長の歓迎祝会の辞あり、田中稔氏の祝辞、宮部先生の御話あり、而して式を終り、次ニハ余興ニ移れり。

各、菓子、林檎を頬張る間ニ、

一、薩摩琵琶 丹治君、一、剣舞 添田君、一、詩吟 添田君、一、手品 野津君、一、花火 古賀君、一、滑稽剣舞、一、福引、一、茶番三人乞食、一、狂言仙人の隠芸、一、影法師解剖、一、活人画松下禅尼、一、茶番達磨問答、一、花火見物ニ輪加、

などありて、これらの係として尽された諸君ハ金子君、野津君、古賀君、添田君、山下君、別宮君、三田村君（鈴木）なりき、午後十時頃ニ終り、青年寄宿舎の万歳を称えて散会せり、それより舎生のみハ権助を遊びて十一時半頃ニ至って止む。

当日の不参加者なる来賓ハ左の如し

石沢達夫氏、同夫人、森本厚吉氏、竹田茂君、橋本健三郎君、藤井為次郎君、松井秀吉君。

十一月九日 江原愛作君肋膜炎（軽症）ニて逸見病院ニ入院さる。

十一月廿三日 荘司経雄君退舎さる。

十二月五日 新聞競売す。

萬朝十二月分 七銭 添田美流君
北海タイムス 七銭 小野崎浩三君
読売 全 十一銭 山下太郎君
中学世界十一月分八銭 鈴木限三君

十二月八日 江原君全快して病院から帰舎せらる。

十二月十五日 水産科一年野沢捨次君入舎せらる、君は謡曲に巧みなり。

十二月十六日 委員会を開く。

十二月十三日 氷滑りが出来るよふ二なって出掛ける人漸く多し。路傍の尻餅搗き盛なり、
歳の暮二近づきたるゆへなるべし。

十二月廿日 農科大学及札幌中学もせいに八本日にて学期試験終了して冬期休暇となる。
最も愉快なる休みなり。

午後三時発車にて角野君温かきホーム帰省せらる。

同じく午後八時頃小野崎君は懐かしき故郷に帰らる。

十二月廿一日 本日は明治四十年の最終の月次会が開かれた。委員として御話しされたのは三田村君、松本君(司会)、松前君、曲尾君の諸君なり。例の如く夕餉は豚飯の馳走あり。六時より開会、今夜は十分以内にて多数の諸君の出説さる、筈なりしが、添田君、別宮君、野沢君、石津君、池上君、山下君、丹治君、田中君、近藤君、和田君、野津君、鈴木君の歳末の感や所感など簡単なる講話あり、次で柳川君の「ウェリヤム・ペン」の話しあり。来客の逢坂君が同君の尊敬し力を得たる去人物につきて話さる、大に有益なる話しなり、最後に宮部先生の例の如く種々の教訓的演説ありて九時頃正式な会は終りて次回の委員を撰挙したり、結果は、

当撰

十一点 丹治七郎君
八点 近藤俊治郎君
八点 和田梓之介君
八点 田中貫一郎君

次点

六点 池上三次君

次は茶菓出で相互に胸襟を開きて話し合ひ又宮部先生の面白き話あり、後に余興には「飛んだタタタ」其他の遊戯を愉快になす、十二時に終りて就眠す。

十二月廿二日 今早朝に鈴木限三君が帰省の途に上られた。

十二月廿三日 近頃の吹雪に引き代えて珍しき好天気なり。

休暇に入りて八暫々相集りてコルッケーやトランプや家族合せなど中々盛に遊び居れり。

十二月廿四日 昨日より大層に暖ナリ。思ひば、今日より冬至なるを殆ど火器を要せず、

休暇なれば一室に多人数集まりて、トランプ Doubt、カルタ、国旗合せ等大に盛んなり、野沢君の謡曲の弟子入りする者、多数なり。

十二月廿二日 福永君は実母様急病にて本朝帰省せらる（旭川）故に以後二週間は、委員が順次に掃除することとなる。

十二月廿六日 非常なる珍しき好天気にて天空は碧色に晴れ渡り日は暖にて書窓を開放するも余り寒からざりき、此夜は北辰病院と独立教会のクリスマスの祝ひありて多くの人々外出し、寄宿は殆ど燈火を見ず。

十二月廿八日 御正月の餅は今朝出来て来たり。

十二月廿九日 今夜会計を始めしが、通帳至らざる為め明日と延期す。

本日来学期の委員の互撰をなす。

会計員	近藤俊治郎君
賄員	和田梓之介君
衛生部員	田中貫一郎君
文芸部員	丹治七郎君

乞ふ、各委員の大なる努力を待って来年度に於ては各部の大々の発展し面目を一進〔新〕せん事を。

十二月卅一日 本年も今日限りとなり何となく名残惜しき思ひがする。回顧すれば吾が札幌農学校に取りては本年は実に一大区別すべき歴史的の大なる変化を来たしたのである。九月十一日に大学開校式ありて今後大に発展せんとす。我舎も大なる盛況を呈して今や満室にて中々賑はしくある。願はくは此の四十年を感謝の意に満ちて送り、来らん四十一年を大なる希望と堅固なる意志と熱心と誠意とを以て迎へて、大に吾が舎も吾が兄弟諸君も新進の気を以て進まん哉！最も努力し最も収穫多き年を得ん哉！！

本夜は「年とり」にて大曾〔屠〕なる馳走があった。

「さつまじる」、皿には鮭の焼物、かまぼこ、みかん、きんとん、乾し柿、錯〔酢〕の物、合香等ありたり。

夜は舎友相集りて新聞室にてストーブを囲みてトランプ、クロッカー、電信等の遊戯をなして大層に愉快地に遊びたり。

来年の新聞競売は左の結果なり。

北海タイムス	近藤君	七銭
万朝報	和田君	十四銭
読売新聞	山下君	十七銭
中学世界（十二月）	近藤君	六銭

卅日に会計の決算ありしが、創立以来未曾有の高価にて食費が九円二十五銭で、其主因は炭其他の物価の騰貴によるのである。

文芸部費は十銭と減じた。